

一 遙かなる思い出の中に 額の傷とおしげさん

私の額には、ちょうどその真中どころに、長さ一吋弱の相当深い傷跡が、左右に走っている。子供のときには、それが余程深かったとみえて、随分気をもんだ記憶がある。写真を撮っても、その傷跡が鮮明にといわぬまでもいつも痕跡を止めていたものであるが、成長するにつれて余り目立たなくなつて来た。

それは私が三、四歳の頃のことであるが（私は一九一〇年生れである）、この傷を受けた場面だけは不思議にもよく覚えてゐる。当時私の家におしげという女中がいた。他に男の雇人が一人いて、これが相当大食漢であつて、随分長く勤めてくれたが、その人についてはこれといつて大した思い出はない。その女中が私を背負つて門の前の田の端で遊んでいた。ところが何のはずみか、私を背負つた儘向き直つた瞬間に、私の額を田を囲む石畳の角にぶつつけてしまった。私の額からは鮮血が淋漓とほとばしり出たものである。ちょうど野良仕事から帰りがけの母が、狂いそうな顔付で、私を抱えて家の中に運びこみ、お灸の草が何かで応急の手当をしてくれた。

おしげさんは、その後二、三年は私の家で働いてくれたが、やがて村はずれの小さい旗亭の酌婦になった。それでも度々私を連れにきてくれたので、私はしょっちゅうその旗亭に招かれざる客となっていた。それから暫くして、おしげさんは病んで死んでしまった。

これが私の生れ落ちてからの最初の淡い思い出である。その旗亭は、昔ながらの藪に囲まれて、昔のままの姿で残っている。この淡い思い出が、私にとっては、年月を経るに従って、益々濃くなって行くような気がする。その旗亭は、村はずれの三叉路の脇にあるが、そこを通る度毎に、私はおしげさんに呼び止められそうな気がするのである。(昭、二八・八)

二 農村に迫る産業革命

吠から紙袋へ

私の長姉は、私が六才の冬、一里ほど離れた村に嫁いだ。姉の年はたしか十六歳であったと思う。名前をてつとつけた。その姉の嫁ぐ日は冬の寒い日であったが、箆箆や長持をかついで行く一連の行列が、私の村はずれの長い坂をいくつも提灯を提げてゆっくり上って行くのであった。私は、この行列に参加したくてたまらなかつたと見えて、その後をどこまでも追っかけた。本家

の従兄が、執拗に行列を追いかける私を抑えて引返してくれたが、私は尚も頑強に抵抗したことを覚えてゐる。

その姉は、間もなく、二人の幼児を残して死んだ。無口な優しい姉であつた。又よく働いた姉であつた。当時私の田舎の農家にとつて、一番大きい副業は、麦稈真田を編むことであつた。裸麦の茎（これを藁といつた）を節のところをさけて五、六寸の長さに切断して、これを硫黄で蒸して脱色したものを、一分程度の幅に裂いて、色々の形に編むのであつた。小さく裂かないで筒のまま編んで行く高等な編み方もあつた。一番簡単なもので一反（二十六間）が二十四、五錢程度のものであつたが、一生懸命に編んで充分一日の労力がかかつた。私なども、六、七歳の頃からこの麦稈真田の編み方を覚えさせられて、休日以外は毎日ように、ちよ、うば、をあてがわれて編んだものだ。ちよ、うば、といふのは、一日中その人に父又は母から割当てられる仕事の分量のことをいふのである。このちよ、うば、をいただいて許りに、私は予習はおるか学校の先生から言付けられてゐる宿題をも、十分果たす暇もない程であつた。日暮れまで魚釣りや球投げに興じて、このちよ、うば、を完遂できなかった時には、母の前に出ることが恰も罪人が検事の前に出るように辛かつたことを覚えてゐる。私の姉の死因は腎臓病だつたといわれている。真田を編むことに熱中して、あるいは割当てられ又は計画した仕事の分量を、何とかして仕上げなければならぬと

いう異常な義務意識をもっていたので、つい小便に立つ時間をも節約して編み続けたことが、その一因ではなかったかと思われる。近頃私は、仕事の関係でよく田舎に帰るが、真田を編むという副業が、吠を織るといふ仕事に代替されていることも手伝つてか、子供が仕事をしているのを見る機会が乏しくなってきた。子供が多いといふことは、村々を歩いてみて、つくづく考えさせられることであるが、それは外に在つて子供が遊びたわむれているせいかも知れない。

私の生家の周辺の農家では、朝の五時頃から、吠を織る機の音が聞えてくる。気候のよい時であればよいが、寒い冬の朝などは、並大抵のことではあるまい。特に女の人にとつては苦しい仕事に違いない。貨幣経済と鉄状態価格差の中にあつて、農家は、今でも副業に追われ責められているのである。ところがその肥料を入れる吠の仕事も、より安価で体裁がよい紙袋に追い出されて、百姓の手から奪い去られようとしている。新しい産業革命の足音は、農家の窓辺まで迫ってきている。時勢の進運にどのようにして農家経済の歩調をあわせて行くかが、真剣な課題になってきた。尤もかような問題は何時の時代にもある課題ではあつたが、今日の科学文明の下にあつて一層深刻且つ緊迫した課題となつた感がある。(昭、二八・八)

三 見栄坊の日本人

寸錢を惜しむ

小学校に入学する日のことであつた。私は茶色の立縞のはいつた絹の着物を着せられた。正にこれは私の唯一の、一張羅の礼服であつた。ところが家を出て間もなく近所のドブの中に、転げこんで、この一張羅の礼服を泥まみれにしてしまつた。その後で、私はどういふ着物を着て学校に出かけたかは、不思議にも思ひ出せない。

中学校に入つて夏の霜降の制服をつくるまで、私はずっと着物を着て通学した。尤も中学校に入つてからは毎日袴をつけていたが、着物といつても、もとより、ありあわせのもので、小学校の低学年の時は、その胸襟のあたりには、飲食物がくつついたり、時には、鼻くそをすりつけたりして、ピカピカと異様な光を放つていたものだ。久留米がすりというのが、当時の男の子にとつては、一番立派な着物であり、子供心に久留米がすりを着ている子供に対しては、淡い羨望を覚えたものだ。私の村で、しょっちゅう（祭典とか正月ばかりでなく）久留米がすりを着ている金持の子供が二、三人はいた。その子を人はボンサンと呼んでいた。中農の倅である私などは、勿論ボンサンの仲間にははいつていなかった。

私は小学校を卒えるまでは、理髪屋に行ったことがなかった。頭髪がのびてくると、父か母かが、カミソリで文字通り坊主のように青々と剃り落してくれた。当時の散髪代は十銭であったが、父母はその金を節約する積りでいたわけである。中学校にはいつてから漸く、私の請を容れて、理髪屋にやってくれた。中学校を了えて、都会に進学するまで、私はその理髪屋の厄介になっていたが、理髪屋の技術が高等のものであり、教養も豊かでなければいけないのだという、職業上の誇りを、その理髪屋さんから繰返し聞かされたものである。

中学校の入学式の日のことである。父が私を連れて入学式に参列してくれた。学校の校庭には、靴屋、カバン屋、洋服屋、文房具屋等が、夫々屋台を臨時に設けて、新入生の購買欲をそそっていた。私は人並に、何よりも革靴が欲しかった。正札を見ると六円と書いてある。私はその屋台の付近を去りやらず徘徊しつつ、到々父に革靴を買ってくれとせがんだ。父は、ゴム靴で間に合うではないか、といってどうしても買ってもらえなかった。屋台に陳列された革靴が、手の届かない片思いの恋人のように、恋しくもあり且にくくもあつたのである。当時はいていたゴム靴の命脈がつかしたその年の夏、私は漸く待望の革靴を手に入れることができたのである。

私は、貧乏なくせに、余程見栄坊であつたらしい。新しく買入れた靴に、誰も注目してくれないので、態々ギクギクと音を立ててみたり、妙に大股に歩いてみたりして、人々の注意を惹いた

りしたものである。その後、どういふ靴をはいたかさだかには思い出せないが、中学時代の晩年は、当時流行の編上靴をはいていたことだけは覚えてゐる。これも流行に投ずるといふだけの心理からではなく、靴下が破れていても、よしまた靴下をはかなくても、それで結構間に合うといふ便宜なものであつたからでもある。

先年私はアメリカに旅行して、アメリカが文字通り小銭を大事にするのに驚いたものである。われわれより数倍も多い収入を得ているアメリカ人が、五セント玉や十セント玉を、無闇に大切にするのに気がついた。ホテルやレストランで、かかる小銭をボーイに渡すと、何等の軽蔑感をもたずに、最大の謝意をこめて受取ってくれる。若し日本の料亭で女中さん達に、十円や二十円の心付けでも渡そうものなら、その女中さん達は、白い眼をして、「何んてけちな旦那だろう」といわぬばかりの顔付をするにちがいない。

アメリカ人の小銭を惜しむ心、小銭を蓄積する習慣が、今日のアメリカをして世界を圧する強大な国に仕上げた唯一とまではいえぬまでも、最大の素因であつたと私は確信する。又われわれの先祖が、小銭を大切にしたりよき習慣が、明治維新以来の日本の発展の根本の原因であつたことを思い起して、ややともすれば最近、子供までが、小銭を小馬鹿にし粗末にしがちな寒心に堪えない時弊に嘆息することがしばしばである。(昭、二八・八)

四 肉筆でえがいた社会

輸入植物と日本の風土

私は、先年、アメリカ各地を旅行して、アメリカ人の生活がいかに単調なのに驚きもし、その単調な生活に耐えられるアメリカ人の神経の太さに敬服もした覚えがある。アメリカ人の生活というのは例えば「活字」のようなものである。月、火、水、木、金の五日は一生懸命に働いて、土、日の二日は大いに享樂する。五日間の勤勞は、後に続く二日を享樂するためのもののようにさえ思われる。しかしその享樂の仕方が、映画や演劇、ドライブその他であつて、はたからみても与えられた一定の時間を、どうして有効に經濟的に享樂するかということが主眼になつていて、享樂そのものが、その国やその地方の、歴史や伝承と些して関りがないように見える。「享樂經濟」ということが、どうも彼等の頭を支配している原理のように思われてならない。

日本の都会、特に大都會の近來の風習も、益々アメリカに似かよつてきているといえるが、それでも神田の明神様とか芝の清正公様とか吉原のお酉様とかの祭典は、江戸古來の伝承を今尚保ち続けている。尤もその色彩は、往時よりも余程褪色してはきているにちがいないが。

農村になると、先ず、休日とか祭日とかいうものが、不規則にやってくる。旧正月の一、二、三日、七日、十五日、二月一日のももて、三月三日のお雛様、四月八日のねはん、五月五日の節句、六月七日の観音様、七月十五、六日のお盆という風に、極めて不規則にやってくる。又その祭日が、夫々違った意味や役割をもっている。そして又その享樂の形式が夫々に違っている。食前に揃える御馳走の種類も違ってくる。これを文字にたとえれば、不規則に書きなぐった「肉筆」の字のようなものだ。

私の各祭典に関する思い出も、その享樂の形式や場面、御馳走や服装の種類その他によって夫々違ってくるので、尽きせぬ興味をそそる。政治がまつりごととして、氏神様の祭典にその起源をもっているといわれるが、農村社会から、この祭事を外したなら、それは極めてヒカラビタものになってしまうだろう。国粹主義や復古趣味が盛んに宣伝された時にさえ、こういう祭事の保護助長についての論議や施策が行われたのを聞いたことがないが、祭事は今日に至るもみんなの力によって保存されている。これは何としてもうれしいことだ。

アメリカの占領軍がやってきて、紀元節をとり止めたり、明治節を改めたり、母の日や老人の日をつけ加えたりした。この改革は、他の占領政策のまずいもののように、無意味であったり、有害であるとは思えないが、双手を挙げて賛成するようなものでもない。日本社会の土壌から生

えぬいたものを、一挙に植え替えるなどというのは、必ずしも感心することではない。人々の生活内容も、かような人為的規制に即応して容易に変容するものとも思えない。

わが国の祭事政策には、もっと慎重な配慮が望ましい。(昭、二八・八)